

無個性な成人式

「土曜寸言」020126

「筒井つの井筒にかけしまろがたけすぎにけらしな妹見ざるまに」
(『伊勢物語』23段)

中学校を卒業して5年間といえ、肉体的にも精神的にも最も急激に変化する思春期晩期の危険な時期である。成人式というのは、その危機をどうにかやり過ぎて、大人へのとば口に立ったことを祝福する通過儀礼だ。

その成人式が荒れるというので、全国3300の市町村はあの手この手の対策を講じている。やれ、父兄同伴とか、恩師同伴、アミューズメント施設で楽しませてしまおうとか、警備員を増やすとかいうのだが、部外者として見ているかぎりどうもしっかりと腑に落ちてこない。

式典に招かれた主人公たちには、危機の年頃をどうにか通過したといういささかの自負がある。5年前の同級生に会って旧交を温めたい、背丈が伸びて格好よくなったところを見せびらかしたい、初恋の彼(彼女)との確執を再開するチャンスである等々、まさに「筒井筒」の気分。彼らの式への参加の動機はいたって個人的なのだ。

しかるに、これを主催する自治体の担当者は、若者に教訓を垂れる絶好のチャンスと見る。そこで首長をはじめ町や村のお偉いさんが入れ替わり立ち代り祝辞を述べることになる。

悲しいことに、この祝辞がたいがい紋切り型で内容空疎、感動的なものはまず皆無だ。「新成

人」にしてみれば、このような退屈な話を聞くために一着150万円もする振袖を工面したのではないし、茶髪に袴の出で立ちを考え出したのでもない。おまけに、会場は長男と長女ばかりが集まっているのだから、我慢などというものは薬にたくも持ち合わせがない。ついつい心ならずも「騒動」に発展するというわけである。

このような空疎な儀式はいい加減にして止めてしまおうという自治体が一つや二つはあってもよさそうなものだが、寡聞にして聞かない。

それにしてもである。ここ数年「成人」に達する年代の若者たちには国を挙げて「個性」豊かな教育を施したことになっている。しかるに、判で押したように、茶髪に、振袖姿の女子、袴姿の男子という出で立ちはどうしたことであろう。騒ぎゆえにたまたまテレビに映った沖縄の新成人が、振袖に白い襟巻き姿なのには驚いた。札幌と全く同じ格好なのである。ちなみに当日の札幌の気温は氷点下10度だが、那覇は23度。さぞや襟巻きの下は汗にまみれたことであろう。

振袖の色と模様にも、二つと同じものが無いことが個性だというのなら、なんともさみしい「個性」ではないか。